

科目名称	デザイン美学 / 芸術理論			授業コード	20001493
担当教員	藤田 治彦				
単位数	2.0	授業形態	講義	科目分類	芸術・デザイン / 芸術・文化
年次	1	開講年度	2020	開講学期	後期
関連資格	教職				
履修制限等					
授業の目的と到達目標(学修成果)	<p>【授業の目的】 造形芸術を中心に、美と芸術について歴史的、理論的に積極的に考察を進める。</p> <p>【到達目標】世界の造形芸術教育の歴史と現在を理解することで造形や芸術全体への興味を高め、文化的相違や、その違いを超えた共通性をともに理解し、世界的レベルでの美的研究の可能性と美的創造能力をともに高めることが可能になる。</p>				
授業の概要(内容)	<p>狭義のデザインは造形芸術のひとつで、広義のデザインは絵画・彫刻・建築等の造形芸術全体またはそれ以上の創造行為を意味しており、さまざまな造形概念を確認しながら講義を始める。造形芸術の基礎となったディセーニョ(デッサン)はデザインと重なる。16世紀のイタリアで始まった造形芸術教育の世界各地での展開を、写真や映像等も用いて解説する。ヨーロッパのアカデミックな美術教育は19世紀まで男性に限られていたのに対し、同世紀、北米では女性教育と不可分に始まっており、この授業にはジェンダー論も含まれる。ジャポニズムと構成主義、装飾芸術と脱構築主義といった、一見異質なイズム同士のある意味で意外な重要な関係を探りながら、現代の造形芸術教育までを、世界各国の諸都市での現地調査を踏まえ、論説していく。</p>				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1: さまざまな造形芸術概念: 美術・工芸・設計・デザイン等 2: 素描アカデミーの創設(16世紀イタリア) 3: 素描アカデミーから美術アカデミーへ(イタリアからフランスへの移行と拡大) 4: 美術アカデミーの拡大(西欧) 5: 美術アカデミーの拡大(北欧) 6: 美術アカデミーの拡大(東欧) 7: エコール・デ・ボザール、装飾美術学校、官立デザイン学校(サウス・ケンジントン) 8: 19世紀-20世紀初頭のアジアの美術教育 9: 19世紀-20世紀初頭のアメリカの美術教育(ジェンダー・構成教育・応用美術) 10: ドイツ語圏の美術アカデミーと工芸学校 11: ダダ、構成主義、ロシア・アヴァンギャルド 12: パウハウスとウルム造形大学、ニューパウハウスとニュースクール 13: 1968年「革命」とその後の芸術改革 14: デリダ「エルゴン・パレルゴン」、脱構築 15: 21世紀の造形芸術教育と芸術の美(まとめ) 				
実務経験のある教員					
授業時間外学習	シラバスを参考に、大学図書館で関連図書を予習として探してみる。講義内容を参考に、大学図書館で関連図書の重要な章または節を読み有効な復習とすること。				
評価方法	レポートと試験による総合評価とする。それらの回数や実施時期は受講者数等を確認後決定する。				
課題・試験に対するフィードバックの方法					
使用テキスト	必要に応じて参考文献の主要部等を配付する。参考書は予め紹介し予習に役立つようにする。				
参考テキスト・URL	<p>ニコラウス・ペヴスナー(中森義宗・内藤秀雄訳)『美術アカデミーの歴史』中央大学出版会 藤田治彦・リチャードベレンホルツ『マンハッタン建築』講談社 藤田治彦『現代デザイン論』昭和堂 藤田治彦『ナショナル・トラストの国: イギリスの自然と文化』淡交社 藤田治彦編『芸術と福祉: アーティストとしての人間』大阪大学出版会 藤田治彦・川島智生・石川祐一・濱田琢司・猪谷聡『民芸運動と建築』淡交社 ジャンソン(木村重信・藤田治彦訳)『西洋美術の歴史』創元社 オリヴィエ・メスレー(藤田治彦監訳)『ターナー—色と光の錬金術』創元社 フランソワーズ・カシャン(藤田治彦監訳)『マネ—近代絵画の誕生』創元社 クレール・デュラン＝リュエル・スノレル(藤田治彦監訳)『ピサロ—永遠の印象派』創元社 マルク・ダシー(藤田治彦監修)『ダダ—前衛芸術の誕生』創元社 Haruhiko Fujita and Christine Guth (ed.), Encyclopedia of East Asian Design, Bloomsbury</p>				
各自準備物					
実習費					
その他					

科目名称	芸術心理学		授業コード	20001322	
担当教員	足立 邦子				
単位数	2.0	授業形態	講義	科目分類	歴史・文化・社会／芸術・文化
年次	1	開講年度	2020	開講学期	後期
関連資格					
履修制限等					
授業の目的と到達目標(学修成果)	美しいと感じる心の仕組み、創造力の源泉はどこにあるのかについて脳の仕組みから理解する。芸術家の意図や手法がどのように脳の働きや仕組みを反映しているかについて、心理学的研究手法や神経科学的研究手法を用いた数々の研究知見から理解する。				
授業の概要(内容)	脳を通してどのようにアートを読み解くことができるのか、その基本的な背景や問題点について概説する。アートを美的感性や社会文化的な観点からではなく、生物学的な所産、進化の所産という視点から考察する。さらに、発達障害や脳の機能障害、精神障害が創造性にどのような影響を与えるのか説明する。アートの表現の法則性が作品の成り立ちの背後にある視覚情報処理や脳の働きをどのように反映しているかについて説明する。				
授業計画	1:オリエンテーション/芸術心理学とは何か 2:心理学史、脳神経科学について 3:私たちは外界をどのように知るか知覚の仕組み 4:芸術家は何を伝えようとするのか 5:欲しがる脳・依存する脳 6:美に対する認知とは 7:進化の問題とアート 8:創造性の遺伝子はあるのか 9:知覚と認知 10:心の発達と病 11:アウトサイダー・アート 12:練習によって変化する脳と身体 13:創造性と心 14:アートとピークシフト仮説 15:黄金比・白銀比と脳				
実務経験のある教員					
授業時間外学習	<ul style="list-style-type: none"> ・使用テキストと配布資料を活用し、授業ごとに必ず復習をする。 ・その他自分が興味をもった分野について、専門書や学術論文を読む。また、学術研究を踏まえた一般書を読む。新聞やテレビ、インターネットから心理学や芸術作品に関する知識をもてるよう心がける。 				
評価方法	全授業回数の3分の2以上出席した者を単位認定の評価対象とする。 ・適宜授業中に課す確認小テスト→60% ・期末レポート(授業外の時間に作成。12月最終授業日に提出。)->40% ※詳細は初回授業時に指示するので必ず出席すること。				
課題・試験に対するフィードバックの方法	<ul style="list-style-type: none"> ・確認小テストについては授業時にフィードバックを行う。 ・期末レポートについては授業アンケートのコメントフィードバック時に全体的な講評として紹介する。 				
使用テキスト	川畑秀明(著)『脳は美をどう感じるかアートの脳科学』(2012年)ちくま新書(ISBN : 9784480066862)				
参考テキスト・URL	<ul style="list-style-type: none"> ・荻阪直行(編)『社会脳シリーズ4美しさや共感を生む脳神経美学からみた芸術』(2013年)新曜社(ISBN : 9784788513587) ・梅本堯夫・大山正(編著)『新心理学ライブラリ1こころの科学を知る』(2014年)サイエンス社(ISBN : 9784781913476) 				
各自準備物					
実習費					
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・履修制限をかける可能性があるため、初回授業に必ず出席すること。履修者数によって初回授業出席者のみを履修対象とする場合がある。 ・授業中の私語については厳しく指導する。場合によって、それ以降の受講を認めないこともある。 ・その他、携帯電話の使用、飲食等、他の受講生に迷惑のかかる行為についても同様の扱いとする。 ・章単位で資料(レジメ)を配布する。 				

科目名称	色とかたち / 色彩論	授業コード	10002392		
担当教員	辻本 道子				
単位数	2.0	授業形態	講義	科目分類	芸術・デザイン / 芸術・文化
年次	2	開講年度	2020	開講学期	前期
関連資格	教職				
履修制限等					
授業の目的と到達目標(学修成果)	<p>無数の色やかたちからなる世界を、どのような仕組みによって意味あるものとして認知するのかについて、主に知覚心理学や感性科学の知見をベースに理解する。</p> <p>授業により習得した人間の情報処理の科学的特性に関する知識を、適切で効果的な視覚情報の形成に関連付け、応用できることを目標とする。</p>				
授業の概要(内容)	<p>視覚的な美しさや躍動感も、色やかたちの知覚と認知という基本的で複雑な仕組みの延長線上にある。この授業では、自然や文化にみられる様々な色やかたちに対する人間の知覚・認知の特性を理解することで、モノ作りの中でも、「モノ」と「見る側の人間」の間にある情報のやりとりを科学的に分析する力を身につけ、的確で効果的な表現の手法を学ぶ。</p>				
授業計画	<p>1: ガイダンス、視覚情報とその要素-色・かたち・奥行き・テクスチャー</p> <p>2: かたちの分類</p> <p>3: かたちの美1-歴史と文化の中で</p> <p>4: かたちの美2-数理性と感性</p> <p>5: 視覚情報と知覚・認知</p> <p>6: 図と地の関係とトリックアート</p> <p>7: かたちのまとまり</p> <p>8: 錯視と芸術</p> <p>9: 知覚の恒常性と絵画</p> <p>10: 光と色</p> <p>11: 色を感じる仕組み</p> <p>12: 色の特性とその利用</p> <p>13: 色とイメージ</p> <p>14: 色とかたちの情報伝達</p> <p>15: 色とかたちの総まとめ、質疑応答、小テスト</p>				
実務経験のある教員					
授業時間外学習	<p>身の回りにある、色や形が魅力的だと感じるものについてスケッチや写真などで記録を取り、各回の講義の中で学んだトピックスに沿って、それらの魅力の源を考えたり、家族や友人と感じ方を話し合うことで内容の理解を深めること。</p>				
評価方法	<p>講義中に課すレポート1回30%、持ち込みなしの小テスト1回60%、平常点(発表、コメントシート)10%</p> <p>※レポート提出がない場合または出席が10回に満たない場合はE評価とする。</p>				
課題・試験に対するフィードバックの方法	<p>提出されたレポートについてはABCの三段階評価で採点する。よくできたレポートについては授業で紹介する。</p>				
使用テキスト	適宜プリント配付				
参考テキスト・URL	<p>三浦 佳世. 知覚と感性(現代の認知心理学1), 2010</p> <p>内閣府認定 公益社団法人 色彩検定協会. 色彩検定 公式テキスト(1, 2, 3UC)各級編, 2019</p>				
各自準備物					
実習費					
その他					

科目名称	西洋美術史 ①②			授業コード	20001600
担当教員	上久保 真理				
単位数	2.0	授業形態	講義	科目分類	芸術・デザイン／芸術・文化
年次	1	開講年度	2020	開講学期	前期 / 後期
関連資格	教職				
履修制限等					
授業の目的と到達目標(学修成果)	<p>美術やデザインの制作・教育に携わる上で必要となる西洋美術史の基礎的知識を身につけるために、キリスト教西欧を中心とする美術の歴史を「近代化」、「世俗化」という視点から概観する。様々な作品の鑑賞を通じ、作品にはそれらが属する時代・社会・文化・思想が深く関わっていることを理解する。</p> <p>西洋美術史の流れを把握する。それを踏まえて今日の美術の変容と多様化について考察することができる。美術の変化がわたしたちの感性や価値観の変化をも反映していることに気づく。</p>				
授業の概要(内容)	<p>主としてキリスト教西欧の美術を学ぶ。そのルーツとしての古代ギリシャ・ローマの美術、初期キリスト教美術や中世の美術にふれ、ルネサンス期以降緩やかに進行してゆく「近代化」、「世俗化」の流れを、自然科学の発達や宗教改革、市民革命や産業革命といった文化的・社会的変化と関連づけて概観する。写真誕生以後は絵画の変容を中心に、芸術についての様々な考え方が生まれ、現代の美術へと向かう道筋をたどる。</p>				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1: 授業ガイダンス、美術史導入 2: キリスト教以前(古代ギリシャと古代ローマの美術) 3: 初期キリスト教美術(東方と西方) 4: 中世の美術(ロマネスクからゴシックへ) 5: 人間中心主義(ゴシック末期からルネサンスへ) 6: 自然科学と美術(ルネサンスの思想と美術) 7: 宗教改革と美術(マニエリスムとバロック) 8: 市民革命と美術(バロックの終焉) 9: 産業革命と美術(新古典主義とロマン派) 10: 写真誕生と絵画(写真、写実主義、印象主義) 11: 非キリスト教美術を手がかりに(ポスト印象主義、象徴主義) 12: 哲学と美術(キュビズムと未来派) 13: 世界大戦と美術(ダダ・シュールレアリスム) 14: ユートピアを求めて(抽象とデザイン) 15: 多様化する美術 <p>定期試験は実施しない。</p>				
実務経験のある教員					
授業時間外学習	<p>各回のテーマについて、各自インターネットで調べる、図書館で関連する本を調べるなどの事前学習を行う:2時間。</p> <p>授業で興味を持ったテーマについて、さらに自分で掘り下げて調べるなどの事後学習を行う:2時間。その他、レポート作成や発表のための資料研究など。また美術館、ギャラリーなどで作品を鑑賞する機会を積極的に持つこと。</p>				
評価方法	平常点(毎回の授業のコメントなど)30%、小レポート・小テストなど20%、期末レポート50%として評価。				
課題・試験に対するフィードバックの方法	可能な限り、次回授業時に課題について触れ、解説等を行う。				
使用テキスト	適宜プリントを配付する。				
参考テキスト・URL	アーノルド・ゲーレン著、池井望訳『現代絵画の社会学と美学—時代の画像—』(2004年、世界思想社)他、授業中に随時紹介する。				
各自準備物					
実習費					
その他	<p>最初の授業時に、授業についての基本的な約束事をプリントにして配布する。</p> <p>授業の進行状況や新しいトピックの挿入など、テーマや毎回の授業計画に多少の変更の可能性はある。</p>				

科目名称	日本美術史 ①②			授業コード	20201611
担当教員	山崎 均				
単位数	2.0	授業形態	講義	科目分類	芸術・デザイン／芸術・文化
年次	1	開講年度	2020	開講学期	前期 / 後期
関連資格	教職、博学				
履修制限等					
授業の目的と到達目標(学修成果)	授業の目的:各時代を象徴する日本美術及び美術に関連する歴史事象を理解する。日本美術作品を多面的に鑑賞する能力を身につける。到達目標(学修成果):日本美術の多彩な表現と様式を説明できる。各時代の代表的な日本美術を比較・考察し、論じることができる。				
授業の概要(内容)	各時代の重要な美術作品、時代背景、日本の伝統工芸、アジアの美術・工芸を含む関連領域の文化、社会的な出来事等に関する基本的知識を理解する。海外の美術、科学技術、美術学校や美術館などの美術をめぐる諸制度、トピックを視野に収め、美術を深く鑑賞する能力を習得する。日本の美術の流れをその社会と文化的な背景を考慮に入れて概観する。縄文・弥生時代から明治、大正、昭和、平成と続く近現代の日本美術までを視野に収める。関連する日本の様々な伝統美術、西洋及びアジアの美術・工芸、芸術文化との相互交流、海外の多彩な文化の刺激を摂取しつつ、独自の美術表現を生み出してきた日本美術の特質を概説する。今に伝わる日本美術の多面的な姿、その伝統と革新の力に満ちた美術を鑑賞し、美術を創造する美術家、それを伝える人々や美術館の営み、さらに新たな時代の美術を生み出す感性について論じる。日本美術を扱う美術館学芸員としての実務経験をもとに、日本美術の収集、保存、展示、研究調査等の視点を特に大切し、作品の取扱い、素材、作品の鑑賞環境と日本美術史との関係についても詳細に講義する。				
授業計画	1: 全体オリエンテーションー縄文・弥生時代、日本美術の特質、伝統と革新、アジアの美術・工芸の流れ 2: 古墳時代及び飛鳥・白鳳時代の美術 3: 奈良時代の美術(天平時代の美術) 4: 平安時代の美術(貞観・藤原・院政時代の美術) 5: 鎌倉時代の美術 6: 南北朝・室町時代の美術 7: 桃山時代の美術 8: 江戸時代の美術1(元禄時代の美術) 9: 江戸時代の美術2(享保・化政時代の美術) 10: 幕末から明治維新へ(開国と文明開化と美術) 11: 明治時代の美術(日本の伝統工芸、アジアの美術・工芸、美術史の再編と近代美術) 12: 大正から昭和へ 13: 昭和時代の美術1(戦前・戦時期の美術) 14: 昭和時代の美術2(戦後・高度成長の盛衰と美術) 15: 昭和から平成へ(80年代とポストモダンの諸相)、全体のまとめ				
実務経験のある教員	兵庫県立美術館及び西脇市岡之山美術館における公立美術館学芸員としての実務経験をもとに、日本美術の作品や展覧会、美術館と日本美術に親しむ態度を涵養し、日本美術の魅力と特質について具体的に講義する。				
授業時間外学習	各種の多彩な日本美術の展覧会や展示場所に赴いて、日本美術の作品を実際に鑑賞する機会をつくること。また作品や文化財の環境に実際親しむ習慣を身につけるために、受講時に報道されている新聞やメディアの紹介記事をチェックし、展覧会チラシなどを収集し、精読すること。				
評価方法	レポート1回(80%)、授業コメントシート(20%)				
課題・試験に対するフィードバックの方法	授業において、レポート課題等に関するコメントを行い、学修を深める関連する有益なテーマや情報を提供する。				
使用テキスト	レジュメを配布。				
参考テキスト・URL	『日本美術の歴史』辻惟雄著、東京大学出版会、2005年				
各自準備物					
実習費					
その他	レポート執筆に際しては、引用文献の確認を厳格に行い、「J」等の引用符を正しく用いて引用すること。引用に際して原典の書誌情報、該当する引用元の原典引用範囲のページを明記すること。				

科目名称	デザイン史	授業コード	20004381		
担当教員	藤田 治彦				
単位数	2.0	授業形態	講義	科目分類	芸術・デザイン／芸術・文化
年次	1	開講年度	2020	開講学期	前期
関連資格	教職、博学				
履修制限等					
授業の目的と到達目標(学修成果)	近代を中心にデザイン史への興味を深め、その文化的価値を理解する。歴史的な美術や工芸をも含めた広い意味でのデザイン、近代デザイン、そして現代デザインの研究を進めることや、実際のデザイン活動にも役立つように、積極的に授業に参加し、国内外のデザインや美術関係者はもちろん諸芸術やものづくりの人々とも十分意見を交わせるように、歴史的知識を豊かにしていく。				
授業の概要(内容)	ペヴスナーの『近代デザインの先駆者たち:モリスからグロピウスまで』を導入部とし、授業前半でバウハウスに至る近代デザインの基礎知識を、新見も加え、確認する。後半では、ヨーロッパからアメリカや日本にも拡大し、異なる文化や、アートとテクノロジーとの関係についても考察を進める。近代デザインや近代建築は20世紀後半に終わったという見方と、広い意味でまだ続くという見方があるが、その理解を「ポストモダニズム」「脱構築主義」等の把握で深める。最後に「ミュージアム・デザイン」をテーマに、世界各地のミュージアムを比較する。それはミュージアムとそこに展示される美術・デザイン作品のあり方を考えるため、授業終了後もデザインの歴史や現代デザインへの興味を高め、理解を深めるよう計画している。				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1: 近代デザイン史研究の先駆者としてのニコラウス・ペヴスナー 2: 近代デザインの先駆者としてのウィリアム・モリス 3: イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動 4: 国際アーツ・アンド・クラフツ運動、アールヌーボー、ユークントシュティル 5: ダダと構成主義 6: バウハウス(ヴァイマルからデッサウへ) 7: マルセル・ブロイヤー(構造と構成) 8: フランク・ロイド・ライトと日本 9: 日本の民藝運動 10: イームズ夫妻とアメリカのミッド・センチュリー・デザイン 11: 1960-70年代の造形芸術の革命 12: ポストモダニズム 13: 脱構築主義 14: ミュージアム・デザイン 15: デザイン史と近代デザイン史(まとめ) 				
実務経験のある教員					
授業時間外学習	シラバスを基礎に大学図書館で予習として関連図書を探し、講義内容を踏まえて復習として関連の章や節を読み、興味深い関連作品を調べてみる。				
評価方法	レポートや試験で総合評価する。それらの回数や実施時期は受講者数等を確認後決定する。				
課題・試験に対するフィードバックの方法					
使用テキスト	必要に応じて参考文献の主要部等を配付する。参考書は予め紹介し予習に役立つようにする。				
参考テキスト・URL	<p>ニコラウス・ペヴスナー(白石博三訳)『モダン・デザインの展開』みすず書房 藤田治彦・リチャードベレンホルツ『マンハッタン建築』講談社 藤田治彦『ウィリアム・モリス:近代デザインの原点』鹿島出版会 藤田治彦『ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』東京美術 藤田治彦『現代デザイン論』昭和堂 ジャンソン(木村重信・藤田治彦訳)『西洋美術の歴史』創元社 フィリップ・B・メッグズ(藤田治彦監訳)『グラフィック・デザイン全史』淡交社 オリヴィエ・メスレー(藤田治彦監訳)『ターナー—色と光の錬金術』創元社 フランソワーズ・カシャン(藤田治彦監訳)『マネ—近代絵画の誕生』創元社 クレール・デュラン＝リュエル・スノール(藤田治彦監訳)『ピサロー—永遠の印象派』創元社 マルク・ダシー(藤田治彦監修)『ダダ—前衛芸術の誕生』創元社 藤田治彦・川島智生・石川祐一・濱田琢司・猪谷聡『民芸運動と建築』淡交社 藤田治彦編『国際デザイン史:日本の意匠と東西交流』思文閣出版</p>				

科目名称	音楽の歴史と文化 / 音楽文化論			授業コード	10002583
担当教員	竹内 直				
単位数	2.0	授業形態	講義	科目分類	芸術・デザイン／芸術・文化／教養
年次	1	開講年度	2020	開講学期	前期
関連資格					
履修制限等					
授業の目的と到達目標(学修成果)	<p>授業の目的</p> <p>1)20世紀の芸術音楽(現代音楽)の歴史的な流れを理解する。 2)時間芸術である音楽を、時間の構成という観点から考える。 3)音楽の多様性を知る。</p> <p>授業の到達目標</p> <p>20世紀の芸術音楽の歴史とそこで生じた問題について、考え、論じることができる。</p>				
授業の概要(内容)	20世紀は、そのほかの芸術ジャンルと同じように、音楽にも大きな変化が起こった時代である。西洋芸術音楽の歴史では、20世紀の音楽のことを、とくに「現代音楽」と呼ぶ。本講義では、その「現代音楽」の歴史的な流れを辿りながら、とくに音楽と時間、聴く・聞くということ、「音楽」の概念の広がりという視点から学ぶ。				
授業計画	<p>1: 導入～20世紀の芸術音楽の歴史を概観する</p> <p>2: 現代音楽のはじまり～ドビュッシー</p> <p>3: 新しい音楽の形を求めて～ストラヴィンスキー</p> <p>4: 表現主義と音楽～シェーンベルク、新ウィーン楽派</p> <p>5: アメリカのモダニストたち～アイヴズ、カウエル、ハリソン、パーチ</p> <p>6: システムの構築～12音技法からトータル・セリエリズムへ</p> <p>7: 音楽における二つの偶然性～ケージ、ブーレーズ</p> <p>8: テクノロジー礼賛～ミュージック・コンクレートと電子音楽</p> <p>9: 音の雲とクラスター(音塊)音楽～クセナキス、リゲティ、ペンデレツキ</p> <p>10: 音楽における引用～ベリオ</p> <p>11: 反復する音楽～ミニマリズム</p> <p>12: 音楽の形と記憶～フェルドマンと時間</p> <p>13: 音と沈黙</p> <p>14: 聴取をめぐる～音をきくということ</p> <p>15: 総論(授業内試験)</p>				
実務経験のある教員					
授業時間外学習	<p>1)西洋音楽史に関する本を読み、現代音楽に至る流れを把握すること</p> <p>2)講義で紹介する本を読んだり、作品を聴いたりすることで、現代音楽に関する理解を深めること</p>				
評価方法	<p>以下の項目で評価する。</p> <p>授業ごとのコメントシート50%、最終回で実施する授業内テスト50%</p> <p>ただし、出席が全体の2/3(10回)に満たない場合は、E評価となる。</p>				
課題・試験に対するフィードバックの方法	<p>1)授業ごとのコメントシートの記述内容を見て、次回授業時に補足説明や質問への回答を行う。</p> <p>2)理解を深めるために重要と思われる本や作品を随時紹介する。</p>				
使用テキスト					
参考テキスト・URL	<p>現代音楽に関する文献は、授業内で随時紹介する。</p> <p>なお西洋音楽史全般の知識については、下記に参考テキストを紹介する。</p> <p>岡田暁生2005『西洋音楽史―「クラシック」の黄昏―』東京:中央公論新社 http://www.chuko.co.jp/shinsho/2005/10/101816.html</p> <p>久保田慶一2017『音楽史を学ぶ―古代ギリシャから現代まで―』東京:教育芸術社 https://www.kyogei.co.jp/syohin/tabid196.html?pdid1=41015</p> <p>近藤譲2019『ものがたり西洋音楽史』東京:岩波書店(岩波ジュニア新書) https://www.iwanami.co.jp/book/b440448.html</p>				
各自準備物					
実習費					
その他					

科目名称	音楽史	授業コード	20002551		
担当教員	竹内 直				
単位数	2.0	授業形態	講義	科目分類	芸術・文化
年次	2	開講年度	2020	開講学期	後期
関連資格					
履修制限等					
授業の目的と到達目標(学修成果)	<p>授業の目的 授業で取り上げる各時代、各地域のポピュラー音楽の歴史を、音楽的特徴や文化的、社会的な背景との関わりも併せて理解する。</p> <p>授業の到達目標 ポピュラー音楽を、音楽的特徴や文化的、社会的な背景から考えることができる。</p>				
授業の概要(内容)	<p>本講義は、20世紀のポピュラー音楽の歴史的展開について学ぶ。ある音楽ジャンルが誕生し、人びとに享受されるに至るまでには、歴史や社会・文化状況、そして音楽と人びとを繋ぐメディアの発達といった様々な背景、要因がある。本講義では、音楽そのものを聴くことと併せて、その音楽を成立させているそうした背景、要因(歴史、社会・文化、メディア)との関わりについての理解を深める。なお、世界中の全ての地域のポピュラー音楽を扱うことは困難であるため、講義ではアメリカ、ラテン・アメリカ、日本を中心に扱う予定である。</p>				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.イントロダクション:ポピュラー音楽の世紀としての20世紀 2.多様化する20世紀の音楽と音楽産業:メディアとしての楽譜・録音 3.新しい「アメリカ黒人」音楽の誕生:初期のジャズ、ブルース 4.都市と音楽:モダン・ジャズ、リズム・アンド・ブルース 5.ラテン・アメリカ音楽の形成 6.戦後のラテン・アメリカ音楽の展開 7.ロックンロールと1950年代アメリカ社会 8.音楽史におけるビートルズ 9.フォーク・ミュージックとベトナム戦争 10.ロック以後の「世界音楽」 11.ポスト・モダンとポピュラー音楽 12.戦前日本のポピュラー音楽 13.戦後日本のポピュラー音楽(1):ムード歌謡、演歌 14.戦後日本のポピュラー音楽(2):「昭和歌謡」からJ-POPへ 15.総説・まとめ 				
実務経験のある教員					
授業時間外学習	講義で紹介する本を読んだり、音楽を聴いたりすることで、理解を深めること				
評価方法	<p>以下の項目で評価する。 授業ごとのコメントシート50%、期末レポート50% ただし、出席が全体の2/3(10回)に満たない場合は、E評価となる。</p>				
課題・試験に対するフィードバックの方法	<ol style="list-style-type: none"> 1) 授業ごとのコメントシートの記述内容のみで、次回授業時に補足説明や質問への回答を行う。 2) 理解を深めるために重要と思われる本や作品を随時紹介する。 				
使用テキスト					
参考テキスト・URL					
各自準備物					
実習費					
その他					

科目名称	グレートフィルムズ批評演習/グレートフィルムズ			授業コード	20001561
担当教員	橋本 英治	槌橋 雅博、谷岡 一郎			
単位数	2.0	授業形態	演習	科目分類	芸術工学基礎/芸術・文化
年次	1	開講年度	2020	開講学期	後期
関連資格					
履修制限等	「その他」参照				
授業の目的と到達目標(学修成果)	<p>共通のテーマ(映画作品)に対して言葉を通して客観的に評論する力、相手の意見をよく理解し、それに対して意見を述べるコミュニケーション能力を身につける。</p> <p>具体的には</p> <p>(1)相手の主張をよく聞き、相手の意見を評価することを議論を通じて学ぶ。</p> <p>(2)「～と思う」、「～と感じる」と述べるのではなく、「～」の根拠を示すことを議論を通じて修得する。</p> <p>(3)発言の中でも、その展開を分かりやすくする「接続詞」を使う技術を身につける。</p> <p>共通の土台である映画作品を通じて、自分の意見を説明し、対話・議論をおこない、作品に対する分析を深め、最終的には、誰もが納得できる論証を行う、この一連のステップを身に付けることが本授業の目標である。</p>				
授業の概要(内容)	<p>二十世紀は映像の時代だといわれる。そして、この世紀を通じて中心的に活躍したメディアは映画であった。今や百数十年の歴史の中で生み出されたおびただしい数の映画が存在している。もはや、人生のすべての時間を映画鑑賞に費やしてもすべての映画を見ることはできないほどである。それは世界遺産に匹敵する膨大な資料であり、芸術であり、技術であり、そして娯楽である。それら幾多の映画作品の中にマイルストーンをなす傑作がいくつもある。そうした映画についてじっくりと議論することが本講義の概要である。</p>				
授業計画	<p>映画はスクリーンに投影されて観客の目に触れる。かつてスクリーンは銀粉を吹き付けられた幕面で成り立っていた。そこで、スクリーンに映される女優は銀幕のスターと呼ばれた。つまり、映画は多様なスターを写し出す鏡のようなもの。</p> <p>銀幕のスターがどのように映像に示されるか、歴代の女優を辿って議論する。</p> <p>1.原節子 安城家の舞踏会 監督 吉村公三郎 1947 89分 没落する華族の中で原節子が人間としての再生を試みる。瀧澤修とのラストのダンスで幕が降りる。</p> <p>2.マリリン・モンロー 紳士は金髪がお好き 監督 ハワード・ホークス 1953 91分 オー・モーレスとマリリンの魅力が爆発。相手役のジェーン・ラッセルもたじたじ。</p> <p>3.京マチ子 偽れる盛装 監督 吉村公三郎 1951年 102分 踏切が降りて、あちらの世界とこちらの世界が分たれる。踏み越えられないこちらの世界を京マチ子が演じる。祇園の姉妹のオマージュ。</p> <p>4.グレース・ケリー ダイヤルMを回せ 監督 アルフレッド・ヒッチコック 1954年 105分 グレース・ケリーが演じる殺人事件の苦悩</p> <p>5.オードリー・ヘップバーン パリの恋人 監督 スタンリー・ドーネン 1957 103分 オードリー・ヘップバーンがファニーフェイスとは意外や意外。原題はfunny face 邦訳は「パリの恋人」。</p> <p>6.高峰秀子 華岡青洲の妻 監督 増村保造 1967 99分 高峰秀子と若尾文子が火花を散らす共演。嫁と姑の確執を描く。</p> <p>7.ジャンヌ・モロー 突然炎のごとく 監督 フランソワ・トリュフォー 1962 107分 二人の男を翻弄する魔性の女 ジャンヌ・モローの無軌道な恋。</p> <p>8.カトリーヌ・ドヌーブ 屋顔 監督 ルイス・ブニュエル 1967 100分 夜に咲く花が、昼に咲く。倒錯した愛の物語をカトリーヌ・ドヌーブが妖艶に演じる。</p>				
実務経験のある教員	映画監督、プロデューサー、脚本家、撮影・録音・照明・編集技師、作曲家、ジャズミュージシャンとしての実務経験がある教員が、その経験を活かし、映画製作のあらゆる領域に関して、「創造者の立場」から映像表現の具体的手法・根幹哲学を教授する。				
授業時間外学習	映画作品の議論を行なうので、監督、作品の時代背景等を大まかに調べておくこと。また、次回の映画作品を論じるためのヒント(参考作品、関連書籍等)を前回の授業の最後に示唆するので、図書館等で参考作品を鑑賞、閲覧するように心がけること。				
評価方法	毎回ディスカッションにおいて、映画作品に対する発言の回数、内容をチェックして評価を行う。				
課題・試験に対するフィードバックの方法	毎回の授業の終了前に、その授業のディスカッションの総括(まとめ)を行う。また、最後の授業で、8回のディスカッションの総まとめを行う。				
使用テキスト	毎回、テーマとなる映画作品についての基礎データ等のプリントを配布する。				
参考テキスト・URL					

科目名称	現代美術		授業コード	20004431	
担当教員	戸矢崎 満雄	中山 玲佳、笹谷 晃生、谷口 文保			
単位数	2.0	授業形態	講義	科目分類	選択必修、芸術工学基礎(2019・2020年度入学生のみ)／芸術・文化
年次	2	開講年度	2020	開講学期	後期
関連資格					
履修制限等					
授業の目的と到達目標(学修成果)	現代アートの作品には多種多様なものがあり、中にはなぜこれがアートなのかと思うものもある。アートの起源から現代の美術へと至る作家や作品の今日的意味とコンセプト(概念・発想)について理解できる。				
授業の概要(内容)	アートにも長い歴史があり、その流れを知ることも重要であるので、源流から、特に近代以降の美術を中心に、実際の作家や作品を取り上げ、その意味することなどを解説する。授業の一部ではアクティブラーニングも行う。				
授業計画	1: プロローグ ～美術の源流を考える～(戸矢崎) 2: 解剖学と遠近法 ～近代美術への流れ～(谷口) 3: 絵具と色彩 ～印象派とフォービズム～(谷口) 4: コラージュ ～シュール・レアリズムとポップ・アート～(谷口) 5: 支持体 ～現代の多様性と表現～(谷口) 6: アートとジェンダー1 ～絵画と写真～(中山) 7: アートとジェンダー2 ～彫刻とインスタレーション～(中山) 8: イメージと表現1 ～映像～(中山) 9: イメージと表現2 ～言葉～(中山) 10: 集合・反復・増殖する ～草間彌生を中心に～(戸矢崎) 11: アートの自己分析 ～私を知らない私～(戸矢崎) 12: 現代社会とアート ～環境に優しい美術～(戸矢崎) 13: 現代彫刻 ～ハイパーリアリズム～(笹谷) 14: 原始的造形 ～インスタレーションとアウトサイダーアート～(笹谷) 15: 身近な造形 ～フィギュア～(笹谷)				
実務経験のある教員	担当する全教員が、美術作家として作品の制作や各種の展覧会などで発表する経験がある。				
授業時間外学習	各回の講義で取り上げられた言葉や作家・作品名について、興味のあること解らないことを調べる事。				
評価方法	「ミニ・レポート」と授業中に行う「制作物」80%、「平常点」20%で評価する。「平常点」とは、「授業の理解度と積極性」。				
課題・試験に対するフィードバックの方法	課題は「ミニ・レポート」と授業中に行う「表現課題」があり、表現課題では発表・講評を行う。				
使用テキスト	各回の講義で資料を配布する。				
参考テキスト・URL	各回にプリントを配布する他に、適時に紹介する。				
各自準備物					
実習費					
その他					

科目名称	アート・マネジメント			授業コード	20002650
担当教員	谷口 文保	かわい ひろゆき、山崎 均、田頭 章徳、さくまはな、藤山 哲朗			
単位数	2.0	授業形態	講義	科目分類	芸術・デザイン／芸術・文化
年次	2	開講年度	2020	開講学期	後期
関連資格					
履修制限等					
授業の目的と到達目標(学修成果)	<p>アート・マネジメントの基礎的知識を習得し、芸術と社会をつなぐアートやデザインのプロジェクトを企画提案できるようになる。</p> <p>アート・マネジメントの概要について説明できる。</p> <p>芸術と社会をつなぐアートやデザインのプロジェクトを企画し、提案できる。</p> <p>芸術と社会をつなぐアートやデザインのプロジェクトの企画書を作成できる。</p>				
授業の概要(内容)	<p>アート・マネジメントの用語や概要を説明し、担当教員が実践してきた多様な事例を紹介し、その特徴や意義を講義する。受講生は、こうした学習に基づいて、芸術と社会をつなぐアートやデザインのプロジェクトを企画提案する。企画提案はグループワークまたは個人で行い、最後の授業でプレゼンテーションを実施する。最後に、全員がそれぞれ企画書を作成し、提出する。</p>				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1: イントロダクション「芸術と社会をつなぐ」(谷口) 2: 美術館とギャラリー(コレクション×キュレーション)(山崎) 3: アートプロジェクトとアートNPO(谷口) 4: アートプロジェクトの企画運営(環境×アート)(藤山) 5: アートプロジェクトの企画運営(ファッション×障害者福祉)(谷口) 6: デザインプロジェクトの企画運営(ビジュアルデザイン×地域社会)(かわい) 7: デザインプロジェクトの企画運営(インテリアデザイン×国際交流)(田頭) 8: アートと異文化体験(アート×国際交流)(さくま) 9: 課題説明、プロジェクトの構想(谷口) 10: プロジェクトの構想(谷口) 11: プロジェクトの企画(谷口) 12: 企画書の作成(谷口) 13: プレゼンテーション・ボードの作成(谷口) 14: プレゼンテーションの練習(谷口) 15: プレゼンテーション(全員) 				
実務経験のある教員	<p>展覧会やアートプロジェクト、アートイベント等を実施してきた経験を活かし、実践事例等を多数紹介して、その企画運営について具体的に講義する。</p>				
授業時間外学習	<p>授業前に、参考図書を読んだり、webサイトでアート・マネジメントについて調べたりしておくことで授業が良く理解できる。授業後に、展覧会やアートプロジェクトを見学し、その事業を実現するために必要な作業について具体的に考えてみると授業内容がより深く理解できる。また、さまざまなプロジェクトや芸術祭の図録や公式ホームページを参考に、主催組織の構成や事業規模、観客動員数やボランティア組織等について調べると、芸術と社会をつなぐプロジェクトの具体的なイメージが把握できるようになる。さらに、アートやデザインのプロジェクトにスタッフやボランティアとして参加すると、授業で学んだ企画運営の知識や技術が飛躍的に身につくようになる。</p>				
評価方法	<p>グループで実施するプレゼンテーション50%、各自が提出する企画書30%、授業態度20%の割合で評価する。プレゼンテーションを発表しなかった場合、企画書を提出しなかった場合、または出席が10回に満たない場合はE評価となる。</p>				
課題・試験に対するフィードバックの方法	<p>最終回では、各グループのプレゼンテーションに対して短い講評を行う。全ての発表終了後に各教員が総評を行う。</p>				
使用テキスト	<p>授業開始時にレジュメを配布する。 (参考書・参考資料等授業の中で参考資料を必要に応じて紹介する)</p>				
参考テキスト・URL	<p>中川真十フィルムアート社編集部『これからのアートマネジメント—ソーシャル・シェアへの道』(フィルムアート社、2011) 谷口文保「アートプロジェクトの可能性 芸術創造と公共政策の共創」(九州大学出版会、2019) 熊倉純子監修「アートプロジェクト芸術と共創する社会」(水曜社、2014) 環境芸術学会「アートプロジェクト・エッジ拡張する環境芸術のフィールド」(東方出版、2015)</p>				
各自準備物					
実習費					
その他					